お　名　前	性　別	終戦時の年齢	現 住 所
夏目　昌儀（まさよし）	男　性	８　歳	新城市上吉田

「東三河郷開拓団 ～ 子どもだけの帰郷」

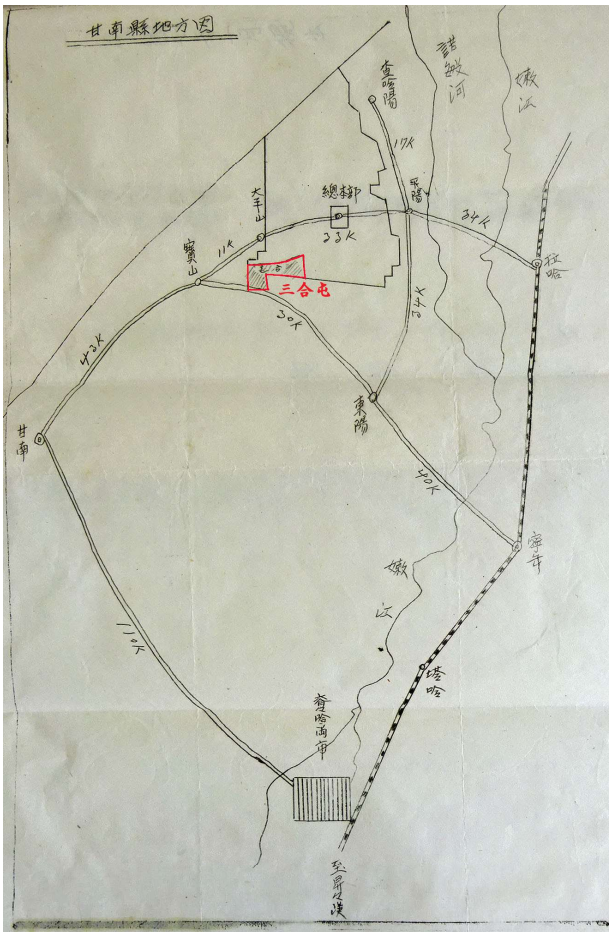
○　希望の国　満州へ

私の父，正夫は東三河村建設の希望を抱き，先遣隊の隊長として満州に赴きました。昭和１４年６月のことです。弟の富雄（叔父）も同伴し，満州開拓の兄弟戦士として新聞にも何度か掲載されました。翌年，父は帰国して家や田畑をすべて売却し，１５年４月に一家を挙げて満州へ渡ることになりました。家が貧しかったこともあり，お国のために貢献できる満蒙開拓に力を尽くそうと決意したようです。私は幼かったので記憶に残っていませんが，出発の際は村を挙げての見送りで，みんな旗を振って送り出してくれたそうです。当時，私は３歳，父３４歳，母３１歳，祖母６０歳，長女１０歳，二女５歳，三女１歳の７人家族でした。入植地は，龍江省甘南県大平山村三合屯東三河開拓団でした。

幼い自分が感じた満州での生活は，とてもよかったです。住まいはオンドルがありましたので，冬でも寒さは苦になりませんでした。野菜は大豆，麦トウモロコシなどがよくとれ，食事にも困ることはありませんでした。父は本部勤めで，シャームータイジンと呼ばれ，敬意をもって慕われていました。

しかし，そんな父は現地召集で軍隊にとられてしまいました。父がいなくなって寂しくなりましたが，農場はクーリー（中国人の小作人）たちがやってくれるので困ることはありませんでした。ですから，戦前まではとてもいい生活で，楽しかった思い出しかありません。

後で知ったことですが，昭和１５年と１６年は，長雨の影響で収穫があまり上がらず，とても苦労したそうです。そのため，家族を迎えに帰国した人の



甘南県地方図　満州東三河村建設関係書類より

中から７名が満州に戻らなかったそうです。そのうち５名は山吉田出身の人たちで，よほど思い悩んだ末での決断だったのだろうと思いました。そんな折，我が家では昭和１６年６月に弟の康次が産まれ，とてもにぎやかになりました。

その後は農作物の収穫も順調になり，開拓団の生活も安定したようです。中国の人との関係もよくなり，私たちも中国人の家を訪ねたりしました。

昭和１９年４月，私は学齢期になり小学校に入学しました。小学校は総本部にあり，歩いては通えない遠方でしたので，東三河開拓団の子どもはみんな寄宿舎に入りました。土曜日にはクーリーが馬車で迎えに来ましたが，家に帰るのはとても待ち遠しかったです。

開拓の様子　昭和46発行 東三河郷開拓アルバムより

そんな頃，弟が亡くなりました。弟は栄養が足りなかったのか，とてもやせていました。私が寄宿舎にいる時に亡くなったので，その時のことは分かりませんが，かわいい弟がいなくなってとても悲しかったです。

○　日本の敗戦，ソ連の侵攻

昭和２０年になると日本軍の劣勢がはっきり伝わってきたようで，敵の侵入に備え，集落の回りに壕を掘って防衛しようとしました。しかし，それもほとんど役には立ちませんでした。８月になると状況が一変しました。ソ連軍の参戦と日本の敗戦でした。ソ連軍はあっという間に攻め込んできました。私たちは数家族で固まっていましたが，壕の中へ入ってきたソ連兵は，持っているものを何でも持っていきました。貴金属や衣服も盗られました。あるソ連兵が，近くにいた豊橋牟呂町の大嶋さんに，「馬に水をやってくれ。」と頼みました。大嶋さんは水をやろうとしましたが，「遅すぎる！」といきなり空へ向けて発砲しました。驚いた大嶋さんが逃げ出すと，ソ連兵は後ろから銃で撃ちました。弾は大嶋さんの太ももを貫通し，亡くなられました。すぐ近くで見たので，自分も撃たれると思って本当に恐ろしかったです。

二人の姉は頭を丸坊主にし，屋根裏へかくれていました。ソ連兵は女性を暴行するので，見つからないように隠れるのに必死でした。その当時は長女の八江が１４歳，二女の玉江が９歳でした。

匪賊と呼ばれる中国人の盗賊もやってきました。中国人は女性を嫁にほしがり，さらっていこうとします。子どもはお金で売られることもあったそうです。満州は敗戦によって秩序がなくなり，無法地帯となってしまったのです。混乱に乗じて中国人が襲ってくると，私たちは四面楚歌の状態になって孤立しました。

○　逃避行のこと

私たちは，４・５軒ぐらいで固まって三合屯から１５０㎞ぐらい離れたチチハルへ避難することになりました。２０人から３０人ぐらいのグループだったと思います。叔父の富雄さんがチチハルまで同行していたので，とても心強かったです。男性の多くは兵隊にとられ，頼りになる人はほんの２，３人しかいませんでした。叔父たちがいてくれたおかげで，何とかたどり着くことができたのです。確か，ドンジャンという氷が張り詰めた川を団のみんなで渡ったことを覚えています。チチハルまではかなりの距離でした。中国人の家に泊めてもらったり野宿したりして行きました。中国の人にはとても親切にしてくれて，日本に帰らずに中国に残るように言われました。ちょうど中国が正月に入った時には，連凧やたくさんのタコが揚がっているのを見ました。のどかでうらやましく思いました。

道中でソ連兵に出会うことはありませんでしたが，中国人の匪賊が待ち伏せしていて，長女の八江が連れて行かれたことがありました。他の日本人女性も何人かいたと思います。その時は，叔父の富雄が必死に追いかけて，取り戻してくれました。どうやって取り戻すことができたのか分かりませんが，叔父さんはすごい，姉を救ってくれた恩人だと思いました。

やっとの思いでチチハルに着くことができました。そこには収容所のような施設があり，板の間の広い部屋に２００人から３００人ぐらいの人が雑魚寝をしていました。そこでは，食べものを手に入れるために，少しでもお金を稼ごうとチチハルの町へタバコを売りに行きました。タバコを入れた箱を首にかけて二人の姉は売り歩きました。私はそれが辛くて，泣き出しては姉を困らせました。

ある時，中国人のジョーさんがチチハルまで訪ねてきてくれました。ジョーさんは，三合屯で４，５人使っていたクーリーのリーダーです。父親がジョーさんにお嫁さんをもらってあげたことがあり，そのためかとても信頼してくれていました。わざわざ私たち家族のために１５０㎞も離れたチチハルまで，まんじゅうなどたくさんの土産を持ってきてくれたのです。親切な中国人は大勢いましたが，ジョーさんは特別でした。

しかし，暖かくなるとチチハルでとても悲しいことが起きました。母いちゑと祖母が亡くなったのです。シラミが発生して毎日つぶすのが日課でしたが，シラミからうつる発疹チフスが流行したのです。手当てをしてくれる医者も薬もなく，毎日のように人がバタバタと亡くなっ

当時のチチハル市街　　満州帝国の興亡より

ていきいました。母と祖母が亡くなったのは，内地へ帰れることが分かってからのことです。二人は帰国をとても楽しみにしていましたから，さぞ無念だったに違いありません。

母は何事も控えめで，縫い物が得意なとても優しい人でした。古着でもきれいに繕って着せてくれました。しかし，チチハルでの母親の姿はなぜかよく覚えていません。食事を作ってくれるのは中国人のクーリーでしたので，そういった記憶がないのです。きっとみんなの面倒を見ていたんだと思います。収容所の近くに忠霊塔と呼ばれる碑がありました。日本人によって建てられたものだと思います。その付近に，母も祖母も埋葬されたそうです。

母親の遺品として，一番大切にしていた象牙の箸だけを持ち帰ることができました。他には何も持ち帰れませんでした。でも，その箸も今はどこかへ失ってしまいました。今も残っているのは，水を入れる水筒と飯ごうです。この二つは私たちの命綱になった大切なものです。

持ち帰った水入れと飯ごう

○　帰国までのこと

チチハルからかその近郊なのかよく分かりませんが，屋根のない貨物列車に乗りました。どこの港へ着いたのか，どのぐらいの時間乗ったのかよく覚えていませんが，汽車が止まった時にサツマイモを買ってもらったことを覚えています。

昭和２１年１０月３日，私たちは二人の姉と妹の４人の子どもだけで帰国しました。船の中で，大きなおにぎりを一人に二ついただきました。ずっと白米を見たこともなかったし，食べられるなんて信じられないような気持ちで，ありがたくいただきました。そのおいしかったこと，忘れることはできません。博多港に入りましたが，すぐには上陸できず，沖に１週間ぐらい停泊していました。いろいろな検査や診察がありました。そして岸壁に着き，上陸しました。「日本だ，やっと日本に戻ったぞ。」と，うれしかったのですが，すぐに白い薬剤（ＤＤＴ）を頭からかけられ，真っ白になりました。痛い注射も受けました。それが強烈な印象として残っています。

一緒に帰った黄柳野の山口一一さんの奥さんが，私たちを面倒を見てくれて連れてきてくれました。しかし，私たちの住む家はもうありません。最初

博多港でDDT消毒　小さな引揚者より

は，乗本の小川にいる父方の叔父で，菅沼さんの家に入りました。しかし，突然４人の子供に入ってこられて面倒をみることは，とてもできることではなかったと思います。他の親戚も頼って，バラバラに預けられることになりました。長女は乗本の叔父の家に残り，私と妹の和子は豊橋の吉川町にある祖母の在所に預けられました。二女はどこへ預けられたかよく覚えていません。

しばらくすると，乗本の菅沼さんが，上吉田の松沢にあった昔の家を借りて，姉弟４人一緒に住ませてくれることになりました。生活は大変だったと思いますが，いっしょに住めることがとてもうれしかったです。長女が食事の世話をしてくれたと思います。

私たちが日本へ帰って１年近く経った頃だと思います。ある日突然，父が帰ってきました。その時のことはよく覚えています。父は豊橋の伯母の所に立ち寄り，私たちが山吉田にいることを知って伯母と一緒に来たのです。子供４人が畳もない板の間でわらを編んだムシロにすわっている所へ，父が国防色の服に戦闘帽子をかぶって入ってきたのです。父は土間から私たちの顔を見て，しばらくぼう然として立っていました。その時は，本当にうれしかったです。ずっと連絡もなく，戦争で死んだかもしれないと思っていたからです。姉たちは泣いて喜びましたが，私は，びっくりした方が先で涙も出ませんでした。父はこの子たちを何としても育てていこうと，決意がふつふつと湧いてきたと後で話してくれました。

父はシベリアへ抑留されていました。丸太切りなどをやったそうですが，父は山仕事や大工仕事が得意だったので，ソ連兵からも重宝されたと言っていました。父は，「どんなにひもじくても，よそのものを黙って盗ってはいけない。干し芋一枚でも，必ずちょうだいと言っていただくようにしなさい。」と厳しく言いました。

○　小学校での悔しい思い出

私は，小学校３年生の後期から山吉田小学校へ入りました。９歳になっていましたが，ろくに勉強をしていなかったので，国語も算数もさっぱり分かりませんでした。いつもバカにされたりいじめられたりで，物がなくなると疑われたりしました。本当に嫌になって，校門まで行ってから山へ遊びに行ったこともあります。でも，そんな悔しい体験があったからこそ，忍耐や我慢といった精神的な強さが鍛えられたと思っています。

私の戦争時代に体験したことは，今では考えられないことばかりです。棄民という言い方をする人もいます。国の方針に従って満州へ渡ったのに，国や軍隊に裏切られて悲惨な運命を背負うことになりました。母や祖母，弟が犠牲になり，故郷でも辛い経験をしました。戦争は，どれほど多くの犠牲と悲劇を生んだことでしょう。二度と戦争を起こしたり巻き込まれたりしないように，平和を守っていってほしいです。

（取材日　令和元年１１月９日）